

盛岡の先人たちとハリストス正教会

長司祭ダヴィド水口優明

1、ハリストス正教会とは

「ハリストス」＝「キリスト」のギリシャ語読み

「正教会」＝「The Orthodox Church」＝ギリシャ語で「正しい教え」「正しい讃美」

「オーソドックス」＝「伝統的」＝二千年間、連綿と受け継がれた歴史と伝統。

欧米で発展した「西方」のローマ・カトリックやプロテスタントとは異なり、

中近東、東ヨーロッパ（ビザンチン）、ロシアで発展した「東方」のキリスト教。

2、盛岡ハリストス正教会の始まり

1861〔文久元〕年に聖ニコライが伝道の志をもって函館のロシア領事館付の司祭として日本に来た時から日本正教会の歴史が始まる。函館でニコライと出会った人々が次々と信仰を持ち、洗礼を受けた。

その中の一人であるペトル大立目謙吾が、1873〔明治6〕年に盛岡を訪れたところから盛岡正教会が始まる。これは、盛岡における最初のキリスト教伝道だと言われている。

盛岡出身の人物で最初に洗礼を受けたのは、1874〔明治7〕年で、4月に4人、7月に17人。1875〔明治8〕年、パウエル澤辺琢磨神父巡回の折、盛岡において73人が受洗。

1876〔明治9年〕年に盛岡市内の加賀野新小路にあった旧武家屋敷が買い求められ、会堂として使用された。戦後、初代会堂の老朽化を受け、1961年（昭和36年）現在地に聖堂が建立され成聖された。

3、盛岡ハリストス正教会と縁の深い先人たちの紹介

① ステファン榎山隆熹（1853〔嘉永6〕年～1898〔明治31〕年7月16日）

1875〔明治8〕年22歳の時に受洗。妻と子供たちも受洗。後に「伝教者」として活躍。聖壽寺にある自分の榎山家の墓地を盛岡ハリストス正教会に献納した。

榎山佐渡（幕末の南部藩家老、戊辰戦争の責任をとらされ斬首）の一族。

政康—義実—直隆—宗隆—隆常—隆好—隆屋—隆尚—隆虎—隆郷—隆冀—隆至（佐渡）

└—五七郎隆秀—良衛門隆致…ステファン榎山隆熹

参考：『南部藩参考諸家系図』『榎山佐渡のすべて』

② 横川省三（1865〔慶応元〕年～1904〔明治37〕年4月21日）

幼名は三田村勇治（三田村勝衛の次男）。横川家の養子となり、省三と改名。自由民権運動家。日露戦争時、軍事探偵となり、捕らえられ、ハルピン郊外で銃殺。

省三の家族（三田村家）はすべて正教会の信徒。彼のみが受洗せず。しかし、聖書を愛読し、最期には自分はクリスチャンだと信仰告白した。

死を間際にして「余は基督教を信じる者である。余は幼年の頃キリストの愛の言葉に感じ、之に帰依している」と言った。最期に牧師と面会を希望したが、その地に牧師はいなかった

ため、正教会の司祭が呼ばれた。葬儀はプロテスタント教会（霊南坂教会）で行われた。

パウエル三田村勝治（勝衛の長男）明治10年6月に15歳で受洗。

モイセイ三田村末蔵（三男）が明治18年5月に受洗。

ペトル弘司（四男）、イアコフ勝弥（五男）、イサアク富弥（六男）、ユリヤつる（長女）、アンナクニ（母）が明治19年11月に受洗。

シメオン勝衛（父）も明治20年1月に受洗。

※ カワトクデパートの名前の由来である川村徳助が正教会の信徒という情報は間違い。確かにメトリカ（銘度利加）に、アナトリー川村徳助の名はあるが、同名異人である。

③ **ペトル新渡戸仙岳**（1858〔安政5〕年～1949〔昭和24〕年9月26日）

教育者、郷土史家、能書家。盛岡高等小学校校長、岩手毎日新聞社長（岩手人名辞典）。

盛岡高等小学校時代の教え子に金田一京助や石川啄木などがいた（盛岡市HP）

明治8年10月20日、17歳の時、ペトルの聖名でパウエル澤辺神父より受洗（メトリカ）

しかし、仙岳の心に正教会の信仰は根付かなかった…

「私は加賀野の教会の信者になったことがあるのです。はやりみたいなもので、クリスチャンになったところで、フランスの思想やロシアの思想というような深いものに影響されたわけではありません」（『仙岳随談』～昭和23年頃の岩手日報記者の森荘巳池氏による筆録）

④ **アレキサンドル見坊田鶴雄**（1883〔明治16〕年～1955〔昭和30〕年1月20日）

第10代（昭和14年9月～18年9月）盛岡市長（56～60歳ごろ）。

明治34年6月9日、19歳の時、アレキサンドルの聖名で受洗（メトリカ）

「本年の降誕祭は…イオアン荒浜、アレキサンドル見坊、諸氏の祝辞演説あり、誰も拍手喝采をもって迎えられ（た）」（明治35年3月15日発行『正教新報』盛岡教会通信）

明治10年10月に田鶴雄の従兄弟ペトル見坊兼綿が受洗したのに始まる。

兼綿の妻アンナ見坊トミ、後妻のフェオドラ見坊ナカ、兼綿の母オリガ見坊コノ、兼綿の子供たちイオアン兼光、イアコフ秀雄、マルク智が受洗している。

オリガ見坊コノ（田鶴雄の叔母）の旧姓は「原」で、原敬の従姉弟にあたる。日記によると原敬は「見坊姉上」と慕っており、葬儀にも出席した。

アレキサンドル見坊田鶴雄の息子が見坊豪紀（金田一京助編の三省堂「明解国語辞典」を実際に編集した人物）で、父である田鶴雄が金田一京助の後輩（盛岡中学校時代）である繋がりから、この辞典編集を任された経緯がある（『辞書を作る 現代の日本語』～京助先生と私と父と～1976年11月20日発行）。

⑤ 宮沢賢治 (1896〔明治29〕年～1933〔昭和8〕年9月21日)

正教会とは直接関係はないが、上京した時に、ニコライ堂を短歌に詠んでいる。

「するが台 雨に錆びたるブロンズの円屋根に立つ朝のよるこび。」

「霧雨のニコライ堂の屋根ばかり なつかしきものは またとあらざり。」

「青銅の穹屋根は今日いと低き雲をうれひてうちもだすかな。」

(大正5年8月17日に保坂嘉内宛てに送られた二十首より)

『春と修羅』の中にある詩「(ふたりおんなじさういふ奇体な扮装で)」の中にある次の言葉は、盛岡正教会にある山下りんのイコンを賢治が見ていたという背景があると推測される。

「めいめい鋏を二挺づつ／その刃を平らにせなかにあて／荷縄を胸に結ひますと／その柄は二枚の巨きな羽／…天使のやうに向きあって／胸に手あてて立つといふ／ビザンチンから近世まで／大へん古いポーズです／…」

(作品番号93 1924〔大正13〕年10月26日)

⑥ ダニイル須川長之助 (1842〔天保12〕年～1925〔大正14〕年2月24日)

植物採集者。植物分類学の父・マキシモヴィッチに絶大なる信頼を得、彼の手となり足となって植物採取に情熱を燃やした。「チョウノスケソウ」で知られる。紫波町名誉町民。

生い立ち

1842(天保13)年2月6日 陸中国紫波郡下松本二十一番屋敷において、農家の須川与四郎の長男として生まれる。祖父から、もしくは父から、植物に関する知識を教わっていたと言われている。

マキシモヴィッチとの出会い

1860(万延元年) 19歳 函館へ出稼ぎに行く。大工見習いやアメリカ商人ホーターの馬丁として働く。同じ仲間の一人が主人の金を盗んだ罪で解雇され、無実の長之助も辞めさせられた。意気消沈した長之助は、知らず知らずのうちに函館のロシア領事館付属の正教会の中に入り、ワシリイ・マホフ神父と出会う。マホフ神父の紹介で、来日したばかりの植物学者マキシモヴィッチ(日本の近代植物分類学に大きく貢献し「東亜の植物学の父」と呼ばれる)の召使として雇われる。

植物採集家として日本全国行脚

植物の知識が豊かだった長之助は、すぐにマキシモヴィッチの植物採集の良き助手となり、函館の山で研鑽を積み、共に日本各地を旅して植物採集を行った。マキシモヴィッチが横浜から帰国した後も、植物採取に日本各地を行脚した。1865(慶応1)年から1891(明治24)年の約26年間。長之助、23才から49才。特に6年間連続で植物採取の長旅に出ている。旅費、日給などは、ニコライ堂をとおして支給された。

信仰

長之助が洗礼を受けたのは、1877(明治10)年、35才の時、(メトリカには39才?)盛岡管轄の郡山正教会において。マキシモヴィッチの影響で、正教会の信仰を持つ。採集旅行の拠点となったニコライ堂にたびたび参拝し、熱心に祈った。全国行脚した途中で各地の正

教会を訪ねた。信徒仲間から「ダニエル兄さん」と呼ばれて親しまれていたという。

晩年と永眠

マキシモヴィッチの永眠（1891〔明治24〕年）の後は、植物採集には出かけることはなかった。最初は長之助を露探だ、ヤソだと毛嫌いした村人たちも、晩年には一目おくようになり、村の長老として尊敬されるようになった。1925〔大正14〕年、自宅において肺炎のため永眠。享年84才。自宅で正教会の埋葬式が行われる。今も岩手県紫波郡紫波町下松本新田にダニエル須川長之助と妻マリヤ須川佐武子の墓がある。

顕彰

- ・岩手大学ミュージアムに須川長之助の植物標本コーナーがある。
- ・志和稲荷神社に記念碑がある。→1924〔大正13〕年、ダニエル須川長之助83才の時、岩泉という医師が發起人となり、長之助を顕彰して記念碑を建立する計画となった。記念碑は、志和稲荷神社境内と内定していたものの、ダニエル須川長之助は「自分は正教徒であるから、境内の外にしてほしい」と要望。長之助の永眠の二か月後に「須川長之助翁寿碑」除幕式。
- ・須川長之助顕彰会による顕彰碑が紫波町城山公園にある。
- ・1978〔昭和53〕年に、紫波町名誉町民となる。

⑦ モイセイ浜野茂（1852〔嘉永5〕年～1914〔大正3〕年9月28日）

投機家（相場師）。兵庫県西宮出身。職を転々とするも、米相場で巨万の富を得る。衆議院議員にも。東京新宿に広大な土地をもち、新宿将軍とよばれた。盛岡在住時代には、煉瓦工場を経営。大津事件の時、信徒代表として山下りんのイコンをロシア皇太子に運んだ。

生い立ち

1852〔嘉永5〕年3月 兵庫県西宮濱ノ町で、七次郎の三男として誕生。西宮屈指の旧家。父は綿問屋。豪放粗暴で読み書きを嫌う。寺で修行を試みるもすぐに家に帰る。11歳の時、隣家の酒屋で手伝いことから始まり、さまざまな所で奉公。いずれも長続きせず16歳まで約80カ所を転々。

13歳で大阪へ。材木屋、米屋、薬屋、砂糖屋、呉服店、酒造屋などを転々。16歳で博徒（やくざ）まがいのことをする。1868（明治元年）年、17歳の頃、政治家の岩下佐治右衛門の目にとまり、太政官に奉職。兵庫県高砂における一揆を鎮めたことで、その頃、兵庫県知事だった伊藤博文に称賛される。

20歳の時、官吏生活に飽きて、代言人（今でいう弁護士）となる。23歳の頃、大衆演劇の座元となり各地を共興。1877〔明治10年〕年、西南戦争の時、西郷隆盛に付き、酒を売って一儲けする。1878〔明治11年〕年、26歳の頃、大阪の堂島で米相場に手を出すも、失敗して、2万8千円の負債を抱える。

東京時代 その1

1877〔明治12年〕年、27～8歳の頃、ほとんど無一文（わずか五十銭）で東京に出る。たまたま行き当たった旅館に事情を説明して助けてもらう。魚屋、酒屋、菓子屋、時計店、料理店など職を転々とするも、最終的には米相場で一儲けした。1882〔明治15〕年、借金を

返済する。新宿に広大な土地を購入。

この頃、すなわち 1877〔明治 12〕年～1881〔明治 14〕年の頃、聖ニコライと出会って、正教会の洗礼を受ける。聖名はモイセイ。（受洗年月日などは不明）

盛岡時代

「…（盛岡）教会の外回りと周辺のことを視察した。万事かなり綺麗で清潔であるように見えた。…当地の鉄道建設のためのレンガを作っている製造会社の社長で当地に住むモイセイ浜野が、教会と家屋の修理用にと寄進した五〇円を、このことのために全額使った…。つまりモイセイ浜野は信徒としての心を失ってなかったということだ。」

（ニコライの日記 1889〔明治 22〕年 10 月 14 日 盛岡）

1888〔明治 21〕年、モイセイ浜野茂（36 歳）は、共同煉化会社を組織し、社長に就任。盛岡で煉瓦工場を設置。粘土の質が悪くて最初はあまりいい煉瓦ができず、冬の気候も厳しく苦勞するも、不屈の精神でなんとかよい煉瓦を製造できるようになる。厨川付近の煉瓦窯で日本鉄道の盛岡工場の煉瓦を何万個も納入。

「日本鉄道会社線第 4 区線ならびに第 5 区線の建設工事では浜野茂が厨川附近で煉瓦を製造して納入したという。」～『日本煉瓦の研究』p157

盛岡工場は解体されるもレンガのモニュメントは盛岡駅西口のマリオスに遺されている。

モイセイ浜野茂の煉瓦工場跡は、現在、盛岡市保護庭園一ノ倉邸（元は盛岡工場に一役買った政治家の阿部浩の家屋）となっている可能性が高い。

東京時代 その 2

1891〔明治 24〕年 モイセイ浜野茂（当時 39 歳）は、体調を崩したため東京へ。煉瓦工場は日本鉄道会社が買い上げる。東京で再び米相場で成功し、巨万の富を得る。新宿の 3 万 6 千坪の土地に大邸宅を立てて、「新宿将軍」と呼ばれるようになる。常に黒羽二重五ツ紋付を身にまとして二頭曳きの馬車で仕事場へ通っていた。

1894〔明治 27〕年 衆議院議員になる。第 4 回衆議院議員総選挙において東京 10 区無所属で当選。同じ年、雨宮敬次郎の後をうけて鑄鉄会社の社長となる。

「モイセイ浜野はきわめて活発な事務家の人だ。貧困のどん底から東京で指折りの大金持ちにのしあがった男だ。」（ニコライの日記 1895 年 11 月 2 日 土曜日）

ニコライ堂建立の際、多大な献金をした「或る商人」が、モイセイ浜野茂だったかもしれない。「それから或る商人は無名で一万円を献じ、只、神は之を知ると言ふのみ。」（『東京ハ

リストス復活本聖堂小誌』明治 41 年)

ニコライの永眠とモイセイ浜野茂の永眠

聖ニコライは 1912〔明治 45〕年 2 月 16 日に永眠。盛大な葬儀が行われる。モイセイ浜野茂はいち早く花環二圈を贈った。

モイセイ浜野茂は 1914〔大正 3〕年 9 月 28 日に動脈瘤（肺臓癌とも）で永眠。享年 63 歳 親交のあった僧侶によって仏式で葬儀。戒名「日新院徳翁茂林居子」。墓地は青山。「会葬する者、松方公、大隈伯、伊東子、後藤男、尾崎法相を初め三千余名に及べり」（～「西宮町誌」）

ニコライ皇太子献上イコンとモイセイ浜野茂

1891〔明治 24〕年 5 月 11 日、来日したロシア皇太子ニコライが、大津において警備の巡查津田三蔵に斬られ負傷した「大津事件」がおこる。本来は、皇太子ニコライは建設されたばかりのニコライ堂を訪問する予定で、その時に山下りんの書いたイコンを献上する予定だった。大津事件のため上京が断念されたものの、山下りんのイコンは、神戸港に着岸していた船上でロシア皇太子に届けられた。その時、佐藤神父、新妻神父、三井道郎神学士と共に、信徒代表として赴いたのが、モイセイ浜野茂だった（当時 39 歳 盛岡から東京に帰ったばかりの頃）。

正教時報二百五十二号に、「聖像献上の顛末」として詳細な報告がなされている。「吾等日本国正教会の信徒は…」で始まり、「…この聖像が我が殿下に於ける深愛重敬の徴儀として納るるの榮と喜びとを吾等に賜わんこと」で終わる挨拶状を皇太子の前で朗読したのは、モイセイ浜野茂だった。その後、艦内で午餐を共にしている。

明治から大正、昭和初期にかけて活躍した盛岡ハリストス正教会と縁の深い人物を紹介してきた。最期まで熱心に信仰を守った人もいれば、そうでない人もいたが、「正教」という真理の教えが、彼等の心・思い・生活に影響を与えた事実注目したい。